

新規農業参入者の確保・定着に向けた 受入体制に関する検討 ー存続可能な農業の可能性に向けてー

皆 川 美 雪

キーワード：メンタルヘルス，農作業，新規参入

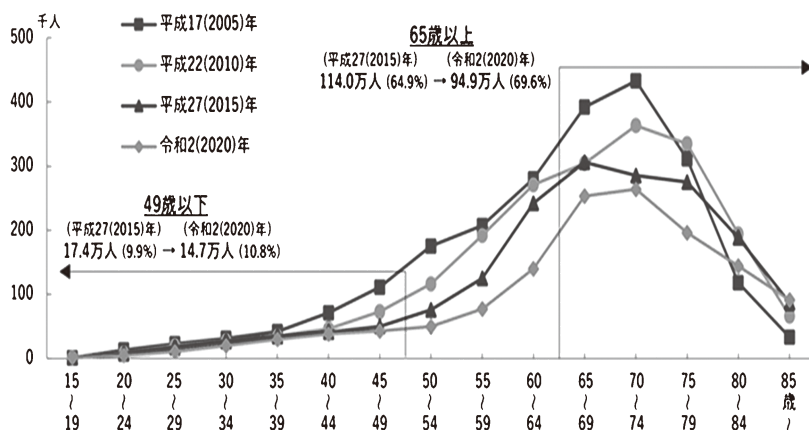
I. はじめに

筆者は、農作業がメンタルヘルスにどのように関与するのかについて、多面的に検討している。農作業の癒しの機能や教育的価値は、現実の農業・農村の在り様と切り離して議論することは難しい。近年は、脱農家傾向や農業の担い手不足がますます著しくなり、農業生産そのものの減少や不耕作農地の増加、食料自給率の低下がおり、農業は危機的な状況に陥っている（田林ほか、2021）という指摘もある。様々な問題を内包した農業と向きあうことは、農作業がもたらす恩恵を検討する際に、外せない要素であると考えている。そのため本研究においては、農業の現状を踏まえ窮地に追い込まれている農業を存続可能にするために、農作業体験や新規参入者受入について農家側の視点から問題点を整理した。さらに、こうした外部参入受入れが持続可能な農業に向けた一助に成り得るのか検討した。

II. 日本農業を取り巻く現状について

我が国における農業の現状は平坦なものではなく、自然環境や食料事情の

変化,さらには,国内外の社会情勢の影響を受けながらも,なんとか適応し,様々な問題を克服しつつある。しかし,日本農業を取り巻く環境は,近年一段と厳しくなっている。とりわけ後継者問題は,喫緊の課題である。農業の担い手が高齢化し,後継者がいない。令和2年の基幹的農業従事者数のうち,65歳以上の階層は全体の70%(94万9千人)を占める一方,49歳以下の若年層の割合は11%(14万7千人)にすぎない(図1)。長年指摘されてきた高齢化問題は深刻さを増し,遂には後継者の育成も難しくなりつつあるのが現状である。一方,新規就農者数は,2014年は57,650人であったが,2022年では45,840人と減少している。さらに,「農業就業人口」をみていくと,2010年には約260万人であったが,その後年間10~50万人はど減り続け,2019年には168万人ほどになっている(農林水産省HPより)。つまり,減少しつつも新規就農者はいるものの,それを上回る離農者がいるということである。農林水産省は,2023年に40代以下の農業従事者を40



農林水産省「農林業センサス」「2010年世界農林業センサス」組替集計 HPより転載

図1 年齢階層別基幹的農業従事者数

万人に拡大するという目標を達成するため、新規参入者に向けて補助金や支援制度を整えつつある。しかし実際には、新規参入者は、「農地の確保」「資金の確保」「営農技術の習得」等で苦戦しているという農林水産省の調査結果もある。せっかく新規就農しても、農業経営が軌道に乗らなかったり、地域に馴染めなかったりして、離農してしまうケースも少なくない。

また、我が国では、農商工当連携促進法（2008年）や地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律（以下、六次産業化・地産地消法とする）（2011年）に基づき、政府が6次産業化を推進している。6次産業化とは、「一次産業としての農林漁業と、二次産業としての製造業、三次産業としての小売業等の事業との総合的かつ一体的な推進を図り、地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取組」（六次産業化・地産地消法の前文より）である。例えば、サツマイモの産地（1次産業）が、その風味のよさに着目して「蜜干し芋」「さつまいもプリン」など関連し用品の開発・製造（2次産業）、さらには、販売（3次産業）まで手掛けて、6次化するような取り組みが増えている。近年は、SNSを活用し、顧客の心を掴み、ファンを獲得し、ブランド化に成功している農家もある。さらに、サツマイモをペースト化するなどして冷凍保存し、通年を通して販売できるような取り組みは、売上アップだけではなく、年間を通した安定的な経営や食品ロスにも繋がり魅力的である。しかし、農家だけで、販売の観点で商品開発し、販売ルートの確保をすることはリスクが高く、2次・3次産業の領域においては、やはり相応のスキルが必要となる。総務省が行ったアンケートによれば、6次産業化事業の進捗が順調と考えられる事業所は21.8%である一方、事業の縮小・徹底・連携解消を考えている事業者も19.3%であった。大規模化・事業の多角化をした事業所ほど事業が順調という結果となっているが、個人で行うには限界がある。そこで農林水産省では、農林漁業者の6次産業化や農商工等連携等の課題の解決を

支援するため、全国に6次産業化に関する相談窓口である6次産業化サポートセンター（以下「SC」）を設置する事業を実施し、6次産業化プランナーを派遣する等により、各種課題の解決を目指している。ところが、こちらも蓋を開けてみれば、SCの利用者からは一定の評価を得ているものの、その活用は低調で、支援が中断しているケースも散見される。6次産業化については、現在抱えている課題を整理し、新たな方策を明らかにしていく必要がある。また、農林水産省の試算では、持続的で力強い農業構造を実現するためには、今後、農業就業者が90万人必要と見込まれており、これを60代以下の年齢層で安定的に担うには、青年層の新規就農者を毎年2万人程度確保していく必要があるとしている。つまり、若い世代を取り込んだ継続可能な農業に向けて、抜本的な検討が求められている。

Ⅲ. 農作業体験等の受入れ側の現状について

近年、癒しやリラックス等を目的としたり、精神疾患を抱える人の社会適応に向けたり、あるいは、障害者の就労支援の一環としてなど、様々な領域において農作業を取り入れる試みが盛んに行われている。しかし、必要に迫られて農福連携（農業と福祉が連携し、障害者の農業分野での活躍を通じて、農業経営の発展とともに、障害者の自信や生きがいを創出し、社会参画を実現する取組、農林水産省HPより）を試みたいと考えても、農業自体の経済的な効率性や継続可能性など農業を取り巻く様々な環境が整わないと、とうてい実現できない。現に、現在の日本における農業収益は見込みが難しく、作業も過酷で担い手が付かず後継者もない。そのため田畑も荒廃し、いざ農作業をしたい人を受け入れようにも田畑がなければ難しい。さらには、農作業は、天候を見ながら毎年柔軟に対応することが求められる熟練したスキルが必要である。全くの素人が俄かに着手するにはハードルが高い。このように背景には様々な要素を踏まえつつ、農作業体験を受入れて下さる方々は、

実際にはいかなる気持ちで、そしていかなる工夫や配慮に裏付けされたものなのだろうか。今回は、農作業体験を受け入れている人達に向けて、インタビュー形式で聞き取りを行った。本研究は、農作業の効率化や利益率という観点ではなく、農作業体験受入者の言葉を通して、農作業の体験側、受入れ側の双方にとって、より良い在り様を探ることを目的としている。

また、新川・松下（2023）によると、農作業の困難さや、やりがいは、1回だけでなく、複数回参加する者だけが知り得る魅力や要因が重要であると指摘もある。つまり、農作業は1回の参加でも、リラックスしたり、気分転換できたりと楽しめる特性もある。年間通して収穫まで辿り付いて見えてくることはあれば、天候により毎年植え方を工夫し、時に失敗しながらより良い物を収穫して辿り着ける喜びなど、長いスパンで試行錯誤し維持することでしか味わえない要因も農作業の本質的な魅力の一つと言えよう。しかし、農業体験は、一般的には単発のイベントやツアーでの参加であったり、福祉的就労においては、就労準備に向けた位置づけになる。例えば、体調がよい時だけ参加したり、定期的な参加は難しいが生活のリズムを整えることを目指し不定期に参加するなど、継続して参加することの知見が積み重なりにくい。これらのことから今回は、4年間継続的に農業体験へ参加している人たちを受け入れている農業関係者に対して、インタビュー調査を行った。農業体験や新規農業参加者に向けた先行研究や環境整備に注目が集まっているが、それを可能にする農業受入側の目線から検討は多くない。そのため本研究の意義としては、新規農業参入者の確保・定着に向けた受入体制に関する検討を行う点にあると考えられる。

Ⅲ-1 データ収集方法と調査内容

対象：東北地方にあるA市で農業をし、農作業体験受入れに携わる人。

今回は、4年前から県内外から新規農業体験者を受入れて、農業指

新規農業参入者の確保・定着に向けた受入体制に関する検討

導をしている4名、Aさん（40代男性、専業農家）、Bさん（40代男性、兼業農家）、Cさん（50代男性、兼業農家）、Dさん（20代女性、農業法人勤務）のヘインタビューを行った。

方法：インタビューガイドに従って、ZOOM等を活用し遠隔にて、半構造化面接を行った。今回は、農作業を受入れている側の心境の変化や、苦慮している点、そして継続するためにはどうあるべきか等を中心に調査した。

調査期間：2024年2月下旬～4月

農作業の受入状況：受入人数は、1回につき、数名～20名程度である。

参加人数は、毎回異なるが、毎回新規の参加者ではなく、10名程度が継続的に参加している。

農業体験開催の頻度は不定期である。ただ、4年の経過の中で、頻度や関わり方が変化している。

当初は、種まき・除草・収穫など、人が必要な時期のみ年数回の頻度で農業体験を開催した。近年は、参加者が自立的に作業できるようになり、毎日取り組んでいる人もいる。そのため参加者の傍で付きっきりで指導する形式に加え、見守りや相談役としての関わりも増えてきた。

倫理的配慮：研究目的・方法・研究参加の任意性と撤回の自由、研究に参加しなくても不利益を受けないことについて説明し、本調査への参加は、回答を以て同意を得たとすることを説明した。なお、本研究の掲載内容について、内容を確認し承諾を得たもののみ掲載している。

—インタビューガイド—

- ・年代 性別 農産物の種類
- ・農業体験の受入れ経験年数
- ・受入れ対象や頻度
- ・農作業体験を受入れての感想
受け入れる前 当初 今
- ・農業体験を受け入れる前後の変化
- ・受入れる際に、留意している点
- ・今後 工夫したい点
- ・今後の農業に期待したいこと など

Ⅲ-2 結果

インタビュー形式にて聞き取った内容をまとめたものを以下に示した。今回は、個人が特定されないよう、質問ごとに回答をまとめた。

① 受入側の農業との関係性

表1は、受入側の農業との関連性、扱っている作物、受入経験などについてまとめたものである。今回の対象は、農福連携の一環として、あるいは、様々な理由からの新規農業参入者を、継続的に受入れている4名であった。表1にあるように、対象者自身が、農家出身者だけでなく、非農家出身者が教育環境により興味を持った方もいる。現在は4名とも農業が生活の一部となっている。県内外から季節や作業内容により、不定期に、水稲や野菜作り、そして地元の名産品でもある柿の剪定・収穫の作業の支援を行っている。受入れ経験や、集団での共同作業の経験については、バラつきがあった。

表 1 受入側の農業との関係性と受入れ経験

農業との出会い
実家が農家で小さいころ頃から、見たり、作業したり。生活の一部。(3名) 実家は農家ではなかったが、学校の先生が農業を好きで、興味を持った。元々、土に触れたり、虫で遊んだり、自然が好き。
現在の農業との関係性
専業農家 兼業農家(2名) 農業法人勤務
受入れ経験
4年ほど前から、県内外からの新規農業者の受入れ(4名)。 数十年前から関東からの修学旅行兼農作業体験の受入れをしていた。地域の役場・農協・青年部とも協力して、民泊したり、牛の見学をしたり。その一部として農作業体験があった。 農作業体験ではないが、水稻などは集落や求人を出して、慣れた人・初めての人、問わず共同作業をしていた(3名) 農福連携し、障害のある方の受入をしている。 頻度は不定期。毎日の場合もあれば、季節や作業内容により変化(4名)
作物
畑(野菜等) 水稻 柿

② 受入側の現状と心境に変化

受入側が対応する際に、留意した点や苦慮した点についてまとめたものが表2である。受入れ当初は、実に様々な場面で想定以上の混乱があったという答えが多かった。受入れ側の心境の変化を時系列に見てみると、当初は、不安・心配・戸惑いなど情緒的に葛藤があったものの、根気強く関わり、互いを尊重する姿勢の中で、楽しい、孤独でなくなるなどの心境の変化が見られた。

表 2 受入側の心境の変化

受入れ前

- 以前から受入れたり、集団で作業していたので違和感はない（2名）
- 大丈夫？本気なの？できるの？農業は甘くないよ。などの戸惑い・心配・疑問
- どうなのか。できるのか。少し心配。

受入れ当初

- 経験がないだろうから、まずは、やってみて慣れてほしい。
- 農機具は、ある意味危険もあるので、ケガだけしないように注意していた。
- 戸惑いばかり。自分にとっては幼少期からやっていることなので当然のことが、全く通用しない。動きも、集合時間も何もかも驚きの連続。正直、こんなこともわからないの？と思うこともしばしばあった。
- 地域の集まりでは、朝仕事をする。6時集合と言え、その前に来て段取りつけて6時に作業開始。でも、来る人は、朝食食べてから・・・と朝仕事が終わるころに集合だったり。段取りも時間配分も違う。
- 慣れないことなので、体調が心配だった。お互い探り探り。

受入れ4年目

- 当初できないことも、本当にわからないということがわかった。やる気がないとかそういうことでもない。出来ることできないことが互いにはっきりした。苦手な部分も沢山あるかもしれないけど、自由に取り組む中で、個性が見えてきた。
- 継続して来てくれると成長が見えてよかった（4人）
- 農作業は、やはり一人で孤独、辛いこともある。一方で、受け入れると、責任もあり心配が増えることも。予想外・想定外の動きをして、危険なことも。目が離せないという意味では、一人でやった方が楽と思うこともある。でも、みんなでやると楽しい側面も。
- 最近は、変わりに指示してくれるリーダーが出来てきてよかった。
- 徐々に、諦めとかそういうことでなくて、お互い認めるというか。尊重できるようになってきた。相手に合わせるというか。当初はイライラする一幕もあったが、それがなくなった。自己主張ばかりでなく、相手を見られるようになった。歯車があってきたというか。これが日常生活でもいい変化をくれた。
- 一人で黙々とやる作業からみんなでワイワイ楽しくできるのはすごくいい。孤独でなくなる。

③ 農作業の指導上の留意点や今後改善したいこと

今後参加者に期待したいことや農作業の指導上留意している点などをまとめたものが表3である。

参加者に期待したいこととしては、参加が少ないと、当然ながらスキルが身に付かない。毎回、同じことを聞くことになってしまうため、叶うならば、自分で作業の見通しができるくらいまでは、継続するとやりがい等が見つけやすいのではないかというコメントが多かった。また、農業は、当然ながら農作物を作るが、可能ならば、収穫し、販売までできると達成感は、まったく違うだろうとの感想が多かった。

作業を伝える際には、まったく経験がない人なので、とにかく一度やって見せてイメージを持ってもらって作業をしてもらう。さらに、一人では難しいのでグループ作りをして補い合いをしてもらっている。その際にも、常に声がけしたり、うまくいかない時には適宜フォローして参加者が疲れすぎないよう気を配りながら、一方で、徐々に作業ができるようになったと手ごたえを持ってもらえるように留意している。

改善点については、品種や苗などを間違えないように、誰でもわかるような情報共有の工夫をしたり、相手の目線に立って考えるようにしている。そして、農作業へのニーズについては、農作業をしたいのか、気分転換をしたいのか、社会参加することが目的なのか。ニーズを整理した方が、対応しやすいとのコメントが多かった。

④ 農業について思うこと

最後に、農作業について自由に語って頂いたものをまとめたものが表4である。そこからは、農業で生きていくことの厳しさが語られている。辛い・苦しい・生きていけない。一方で、「身を置くべきところ」、「生きる力」など、農業の魅力も強く語られていた。

表 3 農作業の指導上の留意点や今後改善したいことなど

参加者に期待すること

- 指示がなくても動けるようになってほしい。
- 体験する人も、1 回だけでなく、通年を通して収穫まですると、慣れてくるといいのかもしれない。

農作業の指導上の留意点

- 農業は体で覚えるものなので、とにかく継続しないとできない（3 名）
- グループ作りをして、とにかく分からなくてもやった方がいい。手をかけすぎず、自分でやって下さいというスタンス。慣れてもらう。
- 人を遊ばせないように指示を出す。常に全体を見るようにしている。
- 作業を説明して、全部一度やって見せて、イメージを持ってもらう。（3 名）
- 農業は、とにかくコミュニケーション、チームワークなので、お声がけを丁寧にしている。
- どこまで踏み込んでいいのか戸惑うこしとも。いい意味で距離を取りながら、見守っている。
- 挨拶とか、休憩の時の会話は大切にしている。
- 何か気が付いた時は、声がけて、フォローする。見守り。ただ、恥ずかしそうにしていたりする人もいたので、急に近づきすぎない。
- 慣れないことだろうから、疲れすぎないように。楽しんでもらう。声がけの仕方とか、昼をとるとか気を付けている。

改善点

- 品種等、誰が見ても分かるように管理する。
- お互いの強みを生かしたあり方を探りたい
- 出荷の納期・天気により、やはり急いで作業を終えることが必要な場合も。しかし、サラリーマンの感覚だと、時間で昼・終了となる。あるいは、お客様感があると、以前の受入れでは、昼ももらえないとか、言い方がきついなど。ネガティブな感想も。戦力なのか、楽しみなのかなどニーズの調整は必要かもしれない。仕事なのか？癒し？リハビリ？等。でも、どんなニーズだとしても少しでも、良い部分を感じ取ってもらえたら嬉しい。
- 体験する人、受け入れる人の、お互いモラルとか、尊厳が必要か。割り切りのではなく人に合わせていく楽しさを

表 4 農業について思うこと

農業について思うこと

- 農業は、正直年々、様々な意味で辛くなっている。でも、辛いばかりでもない。楽しい。
- 兼業なので仕事がなければ、時間に追われずに、純粹に景色みたり、山を見たり。実りも楽しめる。農業だけで暮らせるようになったらいい。
- 子供に継がせたい農業であってほしい。
- 無意識で、自然・農業は、一部というか。身の置くべきところ。あるべき姿。原動力。真の豊かさ
- 仕事としては、儲かる仕組みは必要かと。
- 6次化も、よっぽどの人でないと難しい。
- 高校の職業選択の授業の中で、農業は底辺だった。ホワイトカラーになるべきと言われてきた。
- 農業指導で関東へ行った際、様々な事情でご飯が一食（給食のみ）の人もいた。純粹に、作物を食べて欲しいと思った

Ⅲ-3 考察

農業体験者等を受入れている農業関係者への調査をしたところ、以下のことが見えてきた。

【受入れ側の配慮と気づき】

農業体験者受入の基本的なスタンスは以下のとおりである。

- a. **安全性の確保**：全員が、「とにかくケガのないように」と開口一番語っていた。リスク回避の観点から見えていくと、農機具での事故は少なくなく、大けがや場合によっては死に至るケースもある（末永，2010）。そうしたことを鑑みると、当初は、目が離せず気が気ではなかったという声が多かった。時に、なぜこのようなことも分からないのかと、怒りにも似た感情を彷彿させる一幕もあったようである。
- b. **スケジュール管理**：作業の段取りや集合時間について、受入側と参加者

側の意識には乖離が見られた。天気や作物の納期等の観点でスケジュール調整する受入側と、9時-17時という労働時間に縛られる参加者の感覚の違いは明白であった。殊に、夏の朝仕事に関しては、農家にとって自然の摂理に沿った当然の動きである。暑い夏には日が昇る前に作業をし、そして、夕方涼しくなってから作業をする。出村(1988)の研究では、「農家では、4時に起き6時30分頃まで作業し、朝食の後は昼頃まで畑に出て、夕方は5時30分頃から7-8時頃まで畑に出ており、手元が見えるまでは畑で仕事をしていた」との報告があるように、受入側としては、いうまでもなくこの作業スタイルが基本となる。ところが参加者にとって、この作業スタイルへのコミットは、「面を食らう」事柄の一つのようである。もちろん仕事の中には、深夜・早朝からの仕事も多数ある。しかし、通常そうした仕事を選ぶには、事前に本人なりの意思確認が求められる。ところが、農業を希望する際に、そこまでの想定が出来ていない場合が多い。そのため朝仕事に関しては、参加の目的やニーズにより反応が種々でてくる。癒しが目的であれば時間の制約はない場合もあるが、今後の仕事と考えている人には、当然早朝からの作業を求められる。結局、今のところ受入側が譲歩する形で、時間を調整しているようであるが、長期的には、柔軟な対応が求められるところだろう。

- c. **体調管理への配慮**：普段、室内にいる人が、一日中野外にいることは容易ではない。中には、野外で過ごす経験がほとんどないような人も参加し得る。疲れすぎないよう細心の注意を払っている。殊更、近年夏の暑さが厳しいため、熱中症など体調を崩さないよう目配りは欠かせないという。

これらの他にも細やかな配慮に対応しており、受入側の苦勞が見てとれる。しかし、4年間の農業体験者等の受入れを通して、「成長が見えて嬉しかった」。「楽しんでくれて本当に良かった」。「最近では、リーダーシップと

なってくれる人もいる」ことを本当に喜ばしいことと語ってくれたのが印象に残っている。これは4名全員に通じる回答であり、その懐の深さを感じるコメントであった。

受入当初は、お互い不安や心配があったと振り返っている。馴染みがない人が農作業するのに伴って苦慮することもあっただろうことも語られている。しかし、作業をスムーズにしないからと言って「やる気がない」わけではなく、単に「出来ない」「わからない」ことが分かったら、各々の良さが見えてきたと語っていた。また、4年間の受入れを通して、農業体験者等を受入れて、コミュニケーションの大切さ、お互いを尊重するような在り様の重要性に気づけたという。

【指導上の留意点や改善点】

参加者に期待することは、自立であった。農作業の指導上の留意点としては、作業のイメージを持ってもらうこと、コミュニケーションを取りながら、体験し慣れてもらうことを重要視していた。継続して、せめて年間通して作業することにより、見通しが持てて作業上の工夫ができるのではないかという期待も見られた。そして、改善点については、情報共有の仕方など作業のミスを減らし、お互いの強みを生かして作業したという希望も語られていた。

【改めて農作業への思い】

農業の辛さも苦しさも踏まえた上で、農業は欠かせない要素という認識が強かった。生きていく上で大切な農業だからこそ、農業収入で生きていけることを願う声もあった。この点に関しては、今後の農業のために検討が必要なことであり、同時に、日本の食料問題にも関わってくる懸案事項である。日本の食料の供給をめぐっては、地球全体で起きている異常気象の問題に加え、ロシアによるウクライナ侵攻や新型コロナウイルスの感染拡大などで、

世界的に見ても懸念されている事案である。日本の食料自給率は、低下傾向が続いており、ピークだった 1965 年度は 73% だったが、2000 年度以降は、40% 前後で低迷している（農林水産省 HP より）。食料危機の観点からも、農業の存続可能性を探ることは重要な要素であるが、その前提となるべき農業収入を確保する国策は喫緊の課題である。

IV. 今後に向けて

農福連携やグリーンツーリズムなど、農業体験に伴う教育的・社会的・経済的効果を期待した政策は、近年注目されている。しなしながら、その取組の肝となるべき受入をする農家側からの観点での研究は少ない。この現状こそが、検討すべき課題であり、これらの取組の今後の可能性を大きく左右するものであろう。そのため本稿では、農作業体験等の受入れ側から現状を整理したところ、以下のような体制整備の必要性が明確になった。

① 事前準備の必要性和目的意識の明確化：コーディネート機能の重要性

農作業の特性から農作業の内容やスケジュールは、農繁期かどうか、あるいは平日や休日など曜日に関係なく天候で決まってくる。さらに、あくまで農作物の生育次第でスケジュール調整が行われる。こうした情報を事前に把握しつつ、参加者は、様々なニーズで参加する。例えば、参加者は復職に向けて、社会参加をするため、農業を学びたいため、リフレッシュのため、あるいは新しい何かを期待してなど、多様な参加の在り様を知り、当面自分はどう関わりたいのか決めていくことになる。こうした目的意識を明確にし、受入側にもお伝えすることにより、「お互い探り探り」ではなく、目的に沿った関わりとなる。

一方、受入側も、全く情報なく人を受入れることは様々な意味で大変である。心情として、初対面の参加者が、どのような背景・目的で参加するかな

どの情報を共有しておくことは安心に繋がりを。作業面でも、経験に沿った作業を検討することは安全上必要なことである。

さらに、天候次第ではあるが、ある程度作業内容が決まると、参加者も、服装や準備するものを考えたり、動画で作業工程を事前確認することもできる。こうした事前準備や参加目的を整理することは、農業体験者がより自分らしい農業体験をすることに繋がるだろう。また、受入者と参加者を繋ぎ、双方に必要な情報をきめ細やかに共有するためのコーディネーターが必要であるとの指摘もある。コーディネーターという新たな人材の補充は難しいかもしれないが、従来は、受入側が主に負担していたこの事前の準備等を、双方が打合せをすることによって業務を分担するなどの工夫は、今後必要なことと推測される。

② 受入側の支援の重要性：精神的なサポートや経済的な補償

農業の現状に関するインタビューは、多様な葛藤を含むものだった。そもそも農業を含む1次産業は、高度成長期以降は衰退するとともに若年層の都市部への流出が進んだ結果、急激な高齢化が進んだ（井上・渡辺，2015）。近年になり、食の重要性や農作業の新たな可能性や魅力を再確認し、農業を精力的に行うようになった人も増えてきた。しかし、今農業をしている人の多くは、周囲がいわゆるホワイトカラーの仕事に憧れ流出する中、先祖代々の土地を受け継ぎ、黙々と農作業を続けてきた。もちろん、収穫等の楽しみはあるが、生活のほとんどは厳しい天候の中、一人で地道に作業する寂しさ、やってもやっても終わらない苦しさも多い。様々な想いがあることは容易に想像がつく。さらには、それを吐露する場面も限られている。また、井上・渡辺（2015）によると「農村部という土地柄、農作業や冠婚葬祭、祭祀等を通じたつながりは強く、人々が支え合っている側面が大きい」。台風や災害など緊急時における自他に関わりなく地域全体の作物を守る助け合いは、

こうした農村ならではの信頼関係で成り立っており、さらには「農村独自のルールを大切にする」ような社会的な規範を重んじる姿勢がある。このような地域の根底にある脈々と受け継がれてきた文化の中で、新規参入者を受け入れるということに少なからず「気兼ね」はあったと推測される。新しい人が入ることにより、従来の人間関係のバランスが崩れることを恐れるのは当然のことだろう。

また、参加を受入れる際、地域の数名で受入れるとなると、農家各々で、独自の農業スタイルがあり、それをどのように標準化するかという問題もある。つまり、各農家では、独自のやり方がある。種植えや収穫の時期、肥料の種類等に関して、細やかな手法を主に口伝で伝承してきた。農業を科学的に検証したアプローチではないが、経験に基づいたデジタル化されないその土地ならではの手法を、親から大切に継承してきたものである。つまり、子供のころから身につけているやり方がある。それを俄かに標準化して、参加者に伝えることは、戸惑いを隠せないのが心情と考えられる。

こうした重層的な葛藤ともいうべき問題の解決は、一筋縄ではいかない。さらに、実際に受入場面においても、丁寧な気配りと配慮を行っていた。そうしたことへの労いや様々な葛藤に寄り添う精神的なサポート、あるいは共に語り合うような仕掛けも必要であろう。こうした受入側の葛藤を見逃さず、精神的な側面の支援を検討することは、農業体験者のニーズにコミットした作業内容の提供や存続の鍵になるとも考えられる。受入側の精神的ケアや語り合う場面の設定は、農業という仕事に必要な福利厚生の一つとして、行政が検討したり、農業会社の設立の際には整備することが肝要であろう。

また、経済的な側面から介入も必要である。受入れ側の善意に支えられた形式には限界がある。参加者受入に伴う補助金や、農作物（商品）を損失しないような保険をかけるなどの具体的な金銭面での補償は欠かせない。さらには、根本的に農作物の適性価格に向けた方策は、「子供に継がせたい農業」

「魅力ある農業」としては必須である。農業受入れの前に、農業で暮らすための社会の仕組みは必要である。

本研究では、農業体験等受入れ側の目線で現状を整理し、継続可能な在り様を探る中で、前述のような社会全体としての体制整備の必要性が見えてきた。農業を包摂的にみると、今行われてる農福連携は、打開策の一つとして注目すべきではないだろうか。改めて、農福連携（厚生労働省のHPより）とは、障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組であり、農福連携に取り組むことで、障害者等の就労や生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業分野において、新たな働き手の確保につながる可能性もある。つまり、農業と障害福祉が連携することにより、共生社会の実現を図るものである。農福連携は、障害者にとっては、それぞれの特性を活かした社会参画への後押しとなるものであり、農業分野においては、次世代の担い手づくりや耕作放棄地の活用、産業の維持・発展につながる取り組みともいえる。実際に本調査でも、受入れに伴う葛藤は前述のとおりではあるが、一方で、受け入れることによって農業のやりがいや魅力を再発見する兆しもある。さらには、参加者も癒しや活力を感じるとのコメントもある。つまり、農福連携は、受入農家にとっても存続の可能性があり、さらに、障害者だけではなく、高齢者への支援や生活困窮者などの就労訓練への広がり、ひきこもりの人や触法者などの立ち直り支援の方策の一つとして検討する余地はあると考える。従来の枠組みにとらわれない、「助け合い」「思いやり」を持って共に生きる地域共生社会の実現につながる可能性を秘めていると言えるだろう。

現実に共生社会に向けた歩みが始まりつつある。農福連携を推進する省庁である厚生労働省と、農林水産省、法務省、文部科学省の職員食堂やレストランを活用して「農福連携レストラン」（2023）が開催された（厚生労働省HPより）。農産物は作って終わりではなく、販売して収益を上げることが

求められる。農家独自の6次化推進ではなく、農福連携に携わる厚生労働省と農林水産省に加え、法務省、文部科学省も、共通認識をもって参加したことは注目すべきことと考える。各省庁が、各々の目的のためだけに行動するのでなく、もっと広い視野に立ち協力して取り組む。こうした垣根を超えた協力や協働は、農業だけでなく、障害者支援、労働人口の確保、自殺対策など、日本が抱える問題解決のきっかけになり得る可能性がある。

本調査での対象は、農業体験等を希望する人に応える形で始まり、今も農業体験等の受け入れを継続している農業関係者であった。つまり、相手のためにと思って農業関係者は、戸惑いながらも実に細やかな対応をしてきた。そして「喜んでもらえてよかった」「みんなでやったら楽しくなった」「活気がでた」「自分のやっている作業に意味が見いだせた」というコメントに結び付いている。改めて農作業の意義や魅力を再確認でき、さらには、農業新規参入者の受入の中で、自身の経験が肯定され、自身が必要とされるプロセスであるという側面もあった。辛い状況で農業を続けた人にとって予想外に生まれた自己肯定感が高まる経験となり、この点は、今後の農業の存続にとって、ある意味最も有力な要素となり得るのではないかということが、今回の調査を通して見えてきた。また、この農業関係者の行動やその契機を俯瞰して見ていくと、相手の期待に応えたいと尽力することにより、結果的に自身が楽しみを覚え、自身の作業の意義を再認識し、そして農作業存続の可能性を見出している。自身のためではなく、ほかの誰か、あるいは、地域や社会のより良い在り方に向けた気持ち・アクションが、農業体験の円滑な受入れ体制だけでなく農業の存続、農福連携の改善など様々な問題の解決の糸口になり得る可能性が見えてきた。調査のサンプル数も少なく、試行錯誤の段階ではあるが、農作業受入側にとっても、この農作業体験等の受入れは、社会的持続性の確保と農村社会全体のレジリエンス強化に資するものである。今後もさらに知見を深めていきたい。

新規農業参入者の確保・定着に向けた受入体制に関する検討

〈参考文献〉

- ・ 田林 明・菊地敏夫・西野寿章・山本 充（2021）.『日本農業の存続・発展 地域農業の戦略』農林統計出版 pp71-104
- ・ 農林水産業 HP より 「基幹的農業従事者」
https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/r3/r3_h/trend/part1/chap1/c1_1_01.html （2024 年 2 月閲覧）
- ・ 農林水産業 HP より 「令和 4 年度新規就農調査結果」
https://www.maff.go.jp/j/tokei/kekka_gaiyou/sinki/r4/index.html
（2024 年 2 月閲覧）
- ・ 農林水産業 HP より 「6 次産業化」
<https://www.maff.go.jp/j/nousin/inobe/6jika/attach/pdf/index-1.pdf>
（2024 年 2 月閲覧）
- ・ 総務省（2019）「農林漁業の 6 次産業化の推進に関する政策評価書」
https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/hyouka_190329-2.html
（2024 年 2 月閲覧）
- ・ 農林水産業 HP より 「農福連携等推進ビジョン（2024 改訂版）」
https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/attach/pdf/noufuku_toha-37.pdf （2024 年 2 月閲覧）
- ・ 新川晴紀, 松下光範（2023）.「農業体験における再来訪促進要因に関する調査」『第 22 回情報科学技術フォーラム講演論文集』Vol. 4 pp. 341-342
- ・ 末永隆次郎（2010）.「農業機械による事故災害事例から見た事故原因とヒヤリハット経験について」『日本農村医学会学術総会抄録集』59 pp. 12-12
- ・ 出村克彦.（1988）.「農業の公共投資と農業土地資本の形成：寒冷地畑作地帯総合土地改良パイロット事業の効果.」『北海道大学農経論叢』44 pp. 1-30
- ・ 猫本健司, 曾川満恵（2015）.「新規就農を支援する地域コーディネーターの必要性に関する検討」『酪農学園大学紀要 人文・社会科学編』40(1) pp. 7-12
- ・ 厚生労働省 HP より 「農業×福祉」による 多様な社会参加と役割づくり
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/kouhou/kouhou_shuppan/magazine/202402_004.html （2024 年 2 月閲覧）
- ・ 井上智代・渡辺修一郎（2015）.「農村における健康に資するソーシャル・キャピタルの質的分析」『日本農村医学会雑誌』63(5) pp.724-733

新規農業参入者の確保・定着に向けた受入体制に関する検討

- ・ 嶋谷 円, 胡子揚歌, 木島温夫 (2008) 「大学・地域連携による小学生の農業体験プログラム-1 年間を通じた活動による環境教育的効果」『環境教育』, 17(3), 3 pp. 44-53.